

みんなの
いのち
かがやいている

波北彰真

出遇い ————— 2

いのち誕生 ————— 8

仏さまーアミタ如来ー ————— 13

まなざしと願い ————— 16

いのち輝く ————— 21

気づかぬこと ————— 24

出 遇 い

「中学生はがき通信」という手作りのささやかな便りを、月一回届けはじめから、もう三十年目になります。最初は町内の中学生約六十人に送っていたのですが、新聞・テレビ・ラジオ・本などによって紹介され、今では全国へひろがり、毎月八百通。届け先は中学生を主として、小学生から高齢者までになりました。

「あなたも私も共に、かけがえのない人生を大切に生きていこう」と呼びかけているもので、中学時代の三年間に届く二十六枚の中で、たった一枚でも心に響くものがあり、「本来のじつ」「元気いへんじ」ができれば、それでいいと思っています。月々続けているうちに、いつしか三十年になったのです。振り返って見る時、よくもここまでこのささやかな、しかも厚かましい営みを、支えられて続けさせていただいたなと思います。毎月待っていてくださる方があり、協力して手伝っ

てくださる方もあり、多くの支えによるものと感謝しています。

この三十年の間には「もう、これでやめよう」と思ったことがありました。

それは、平成二年七月のこと。妻が急逝したのです。

日頃、元気になっていたのですが、突然倒れたのです。救急車で入院し、検査の結果も膜下出血で手術ができないほどに重い状態でした。意識もなく、一言も言葉を交わすことができぬまま、倒れてから二十時間余りで五十二年の生涯を終え、仏さまの浄土へ往きました。

あまりにも急な別れでしたので、深い悲しみの中で何をやる気にもならず、何もまとまりません。

「中学生はがき通信」は、その七月が百九十九号でした。

支えを失って無気力になっていたので、百九十九号という区切りで「やめよう」と、本気で思いました。その時、フツと「八月は、二百号ですネ」と心待ちにしていた妻の言葉を思い出し、毎月待っていてくださる多くの方があるのだと思

なおし、とにかく続けることにしたのです。

そして二百号では、妻との別れにあたって「出^あ逢^あい」というテーマで語りかけました。

出逢い

あまりにも急な別れでしたが

母と子 妻と夫 友たち

それぞれに

いのちといのち

心と心のふれあった

確かな出逢いの中に

共に生きてきたことを

今なお共に生きていることを

ありがたく思います

『人生のほほえみ』

母と別れた悲しみに沈んでいる三人の子供と、妻と親しくしていた友たちに語りかける気持ちで、人生における「出逢い」の大切さとするばらしさを考えてほしいと呼びかけました。

早速、六社もの新聞記者が取材に来られ、それぞれに「であら」という言葉で、「出」の字をなぜ使ったのかと質問されました。

「あ」「お」「は」「は」「は」「は」いろいろな字があります。会う・合う・逢う・遭う・選う・値う・出会うという字がありますが、いのちなのであ、い、心のであ、い、それには「出」の「出」の「出」が、最も自分の気持ちを表せると思ったからです。

ところが、ある新聞に掲載された記事を読んで、アッと息をのみました。「出逢い」を「出遭い」と書いてあったのです。こだわらなくともいらいと言われるかも知れませんが、親と子であいが「ひとために遭う、遭難する」という出逢い